

グロ的憑依靈

之は頗るグロで興味のある憑靈現象であつた。確か昭和八年頃だつたと思ふ。当時四十二歳の男、仙台の脳病院へ入院加療したが、更に効果がないので東京の慶応病院に診察に来たのであつた。処が此男の症状といふのは頗る多種多様でグロ極まるものである。特に最も著しいのは普通人には見られない高熱で、体温計を挟むや忽ち体温計の最高である四十三度に昇るのである。それだけならいいが、体温計の破裂する事が、屢々あるので、脳病院でも実に困つたといふ事である。勿論四十三度以上の超高熱であつたからで、最初慶応病院では解熱剤の注射を三回行つたが少しも効果がない。之以上は危険だからと注射をやめたといふ位で、そこで医療を諦め他の療法を求めてゐた処、偶々私の事を聞き訪ねて来たのである。

私の前へ座るや五尺七八寸位の大男で、物凄い悪寒が起つた。ガタガタと慄え出す状は嘗て見た事もない猛烈さである。私は体温計破裂の熱は之だなと思つた。早速彼の背後に廻り、抱えるようにして

全身の靈を彼に向つて放射するや、忽ち効果が現はれ、身慄ひは五分位で全く治まり、輕熱位になつたので、彼は暗夜に光明を認めた如く欣喜雀躍し、是非とも私の家へ置いてくれといふのである。彼の語る種々の話を聞くと靈的研究にはもつてこいの相手なので私は快諾し、彼の言ふ通りにしてやった。之から起る靈的現象こそグロ的興味の深いものであつた。

時々彼は無我に陥り、頭が痛い痛いと呼ぶのである。私が靈射をすると、十分位で常態に復すので聞いてみると、彼は以前狩獵が好きで、或日一匹の狐を射った。傍へ近寄ってみると未だ生きてゐて、イキナリ起上つて彼に向つて來たので、彼は銃を逆に持ち、台尻を振上げ、狐の眉間目がけて一撃を加へたので狐はそのまゝ死んでしまつた。その狐靈が憑依するので、憑依中頭痛の外に精神病的症状もあつた。

又彼は無我に陥ると共に、「木を除けて呉れ、木をのけてくれ。」と連呼するのである。之はどういふ訳かと聞くと、彼が北海道に居

て樵をした事があつた。或時大木を伐り倒した時にその倒れた木の下
の凹所に人間が一人寝てゐて氣絶したのである。それを彼は知つて
か知らずにかそのまゝ山を下つた。後で氣絶者は息を吹きかえした
処、負傷の身体で木を排除ける事が出来ずそのまま死んだ。その
靈の憑依である。

又彼が殺した熊の靈も時々憑いた。その靈が憑ると非常に物を喰ひ
たがる、或時の如きは一度に鯨十一本喰つた事がある。

又彼には蛇の靈が二匹憑つてゐた。之も彼が殺したその靈で、一匹
は腹に居て時々絞まれる如き痛みで苦しみ、一匹は首に巻き着いて
喉を締め、呼吸を絶やそうとする。その都度私は靈の放射をしてや
るとジキに治つたのである。

次に之は靈的ではないが、彼は最後に全身的浮腫を生じ、時々廊下
で倒れる事があつた。何しろ大男が浮腫と来てゐるので特に大きく
なり、男子三人掛りでやっと部屋へ引ずって運んだ事も度々あつ
た。其際鞆丸が小提灯大に腫れ、浴衣からハミ出て隠す事が出来ず

随分人から嗤はれたものである。之を最後として全快し、健康者となつたのである。